

第3回 永青文庫セミナー

細川重賢夫人の手紙

川口 恭子

1. 夫人の人となり

久我右大臣通兄卿娘 由婦
 享保15年(1730)正月28日誕生
 結婚 寛延3年(1750)2月27日

久我家は公卿で村上源氏の一流、中院流の一つといわれる。先祖の源雅美が鴨川と桂川が合流する久我(京都市伏見区)の地に別荘をいとなみ、久我太政大臣と呼ばれたことにはじまるとする。家業は笛と書かれているが、当道支配の家である。当道とは目の不自由な人が琵琶や琴・三味線・鍼・灸・按摩などを職業とするが、その免許を与えた家である。

細川家との関係は、系図に示したように、近世細川家第5代綱利が、弟新田支藩主利重の娘具を養女として、久我右大臣惟通と結婚させたことにはじまる。重賢夫人の祖母である。

2. 現存する夫人の手紙

重賢に対して出された夫人の手紙は別紙の通りである。(参照 手紙一覧表)

明和4年3月11日から同月29日まで	3通
明和5年6月7日から翌6年3月6日まで	30通

表紙の言葉

今号の表紙は貴重資料展「源氏物語千年の時」でご覧いただいた、幽齋筆『源氏物語』です。行間などに細川幽齋(藤孝)の手による書き入れ注がみられます。詳しくは徳岡先生の文章をご一読ください。

明和4年3月の手紙は、長男胤次(治年)の疱瘡全快のこと、側室嘉門着帯のことが書かれており、嘉門は同年9月8日に次男豪次を産んだ。重賢は明和3



年5月1日江戸を出発し、6月4日熊本着、明和4年正月は熊本で過ごし、3月5日熊本を出発し、江戸着は4月9日である。この時も側室の此井・嘉門は重賢のお供をしている。

明和5年5月1日江戸を出発し、木曾路を通過して、6月6日熊本着である。翌年の参勤は、3月5日熊本を出発し、4月17日江戸に到着した。この期間の夫人の手紙であり、側室の此井・嘉門はこの時も重賢のお供をしている。

3. 手紙の形

一覧表に示したように、折紙1枚から2枚綴り3枚綴り、最も長いものは5枚綴りまでである。切紙も1枚から長文の切継紙が多い。

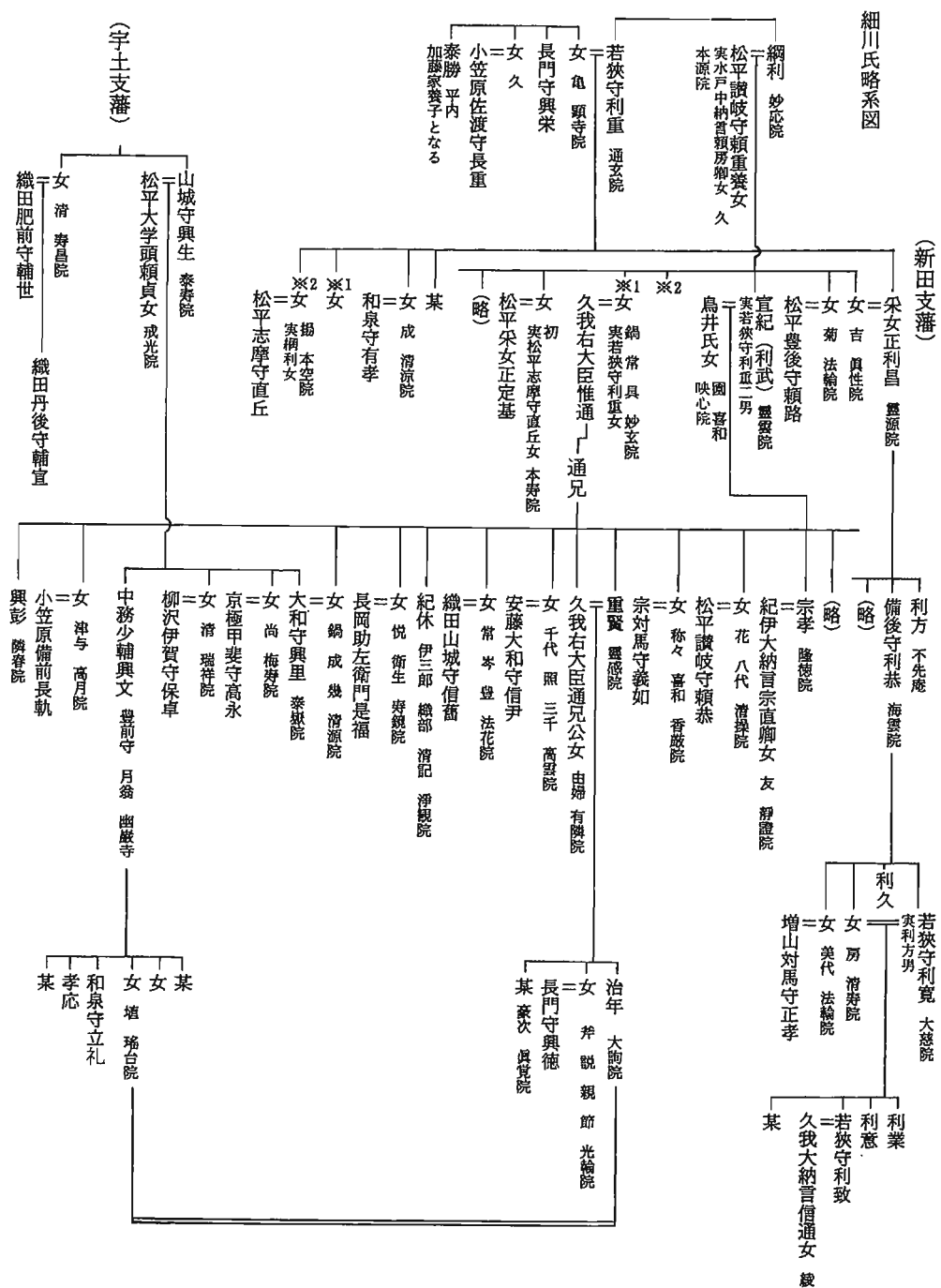
宛名は侍従様、花君の2種。差出人もゆふ、蘭舟(船)の2種である。

重賢は延享4年(1747)11月28日従四位下侍従に叙任された。

花君は重賢の俳号、花(華)裏(裡)雨からとられたものである。夫人の俳号は蘭舟(船)である。

なお、No. 26歳暮の祝儀状とNo. 27年賀状は散らし書きである。

【細川氏略系図】



『重賢公日記』下卷 (出水神社, 1989. 2) より著者作製系図を一部修正の上転載。

【手紙一覧表】

No.	年月日	形式	宛名	差出人名	内容
1	(明和4年) 3月11日	折紙	花君	蘭舟	橋本源右衛門 8日江戸着 胤次痘瘡快復に着の礼
2	(〃)	折紙 3枚綴	花君	蘭舟	橋本源右衛門 8日江戸到着 胤次痘瘡のこと かもん着帯のこと お土産を待つ
3	(〃) 3月29日	折紙	侍従	ゆふ	熊本発足・室住・室着祝、道中ご無事で 胤次のこと 斧のこと 此井・かもんは東海道か木曾路か
4	(明和5年) 6月7日	折紙	侍従	ゆふ	暑中見舞 大坂着を祝
5	(〃) 水無月7日	折紙	侍従	ゆふ	暑中見舞 白金・子供達のこと
6	(〃) 水無月7日	折紙 2枚綴	花君	蘭舟	時候挨拶 星糞(魔よけ)の礼 白金・子供達のこと 中務少輔(月翁)の安否尋ね
7	(〃) 水無月23日	折紙	侍従	ゆふ	鶴崎着・熊本着を祝 筒口・二の丸・宮内より便り 子供達のこと
8		折紙			6月15日祭り見物のこと
9		切紙			追伸 天候のこと
10		切紙	花君	蘭舟	鶴崎着を喜ぶ
11	(〃) 6月27日	折紙	花君	蘭舟	残暑見舞 子供達のこと 平太左衛門の安否を問う 此井へよろしく
12	(〃) 6月27日	切継紙 色紙	花君	蘭舟	静証院肩の痛み 子供達のこと 清源院逗留
13	(〃) (7月27日)	折紙	花君	蘭舟	6月18日お手紙の返事
14	(〃) 7月27日	折紙 5枚綴	花君	蘭舟	静証院肩の痛み 智鏡院年賀和歌集作成のこと 胤次生身玉の祝 子供達のこと 酒事なく下戸となる
15	(〃) 9月朔日	折紙	侍従	ゆふ	御機嫌伺 八朔の祝 月見の肴の礼 京都妹の安産
16	(〃) 菊月朔日	折紙 4枚綴	花君	蘭舟	7月19日付お手紙の礼 静証院・清源院、子供 達のこと 27日月見し楽しんだこと 龍口上屋敷の家臣達
17	(〃) 菊月22日	折紙	侍従	ゆふ	返書 弟久我信通の春宮大夫宣下を喜ぶ

No.	年月日	形式	宛名	差出人名	内容
18	(〃) 9月22日	切継紙	花君	蘭舟	静証院肩の痛み全快 清源院来邸 京都より職 惣検校来り 琴を弾く 子供達の食事・行儀の躰けについて
19	(〃) 10月18日	折紙 2枚綴	花君	蘭舟	9月18日のお手紙の礼 9月17日稽古能の番付 拝見 智鏡院年賀和歌集のこと 子供達のこと
20	(〃) 神無月18日	折紙 3枚綴	花君	蘭舟	寒気お見舞 10月9日亥猪の祝の礼 智鏡院の来邸 子供達のこと
21	(〃) 11月11日	折紙	花君	蘭船	寒中お見舞 参勤時節伺について 白金・子供達のこと
22	(〃) 11月11日	折紙 3枚綴	花君	蘭船	10月5日付お手紙の礼 稽古能の番付拝見 子 供たちのこと 省略の書付拝見・承知 上屋敷の家臣の消息
23	(〃) 霜月19日	折紙 3枚綴	花君	蘭舟	先月18日付飛脚便着ご返書の礼 膝の具合尋ね 儉約のこと 子供達のこと 文箱の礼 水前寺 出浮について
24	(〃) 11月21日	切紙			追伸 膝の痛みの快復を喜ぶ
25	(〃) 12月19日	切継紙	花君	蘭舟	霜月23日付お手紙の返事 白金・子供達のこと うどん・鴨拌領の礼 年忘れの酒事
26	(〃) 12月22日	折紙 散らし書	侍従	ゆふ	歳暮の祝儀状
27	(明和6年) 正月朔日	折紙 散らし書	侍従	ゆふ	年賀状
28	(〃) 正月5日	切継紙	花君	蘭舟	12月2日付お手紙の返事 白金・子供達のこと 初馬懸物進呈 智鏡院へ進呈の小袖出来
29	(〃) 2月18日	折紙	侍従	ゆふ	京都弟久我信通の従二位昇進の祝に対する礼状
30	(〃) 2月18日	切継紙	花君	蘭舟	正月15日お手紙の礼 智鏡院年賀祝 子供達のこと お手製のコタツのこと 妙解院参詣 道 中ご無事を祈る
31	(〃) 弥生朔日	折紙	花君	蘭舟	静証院のこと 清源院・埴姫来邸 子供達のこと 道中のご無事を祈る
32	(〃) 3月6日	折紙	花君	蘭舟	熊本ご発足を祝 子ノ神に代参 御符進上 道中のご無事を祈る
33	(〃) 3月6日	切継紙	花君	蘭舟	静証院年賀祝 智鏡院歌集 子供達のこと 参勤途中、京都久我邸へお立ち寄り願う

4. 儉約に関する手紙

重賢は、世上、宝暦の改革といわれる行財政改革を行い、藩の建て直しを行った名君としてよく知られているが、その後も改革は引き続き実行した。

中老として重賢を補佐した堀平太左衛門は、明和3年11月家老となるが、藩の総収入34～35万石に対し、支出の総額は39万5千石であり、損亡高も17万5千石であったので、翌年から5ヶ年間の儉約・省略を命じた。明和4年には、5ヶ年間儉約を命じ、家中の手取米は13石としたが、翌5年10月2日、再び、今年から5ヶ年間格別省略を命じた。

この儉約・省略令に対する夫人の手紙がNo. 22折紙3枚綴りの11月11日の手紙である。2,000文字を超える長文であるが、現代訳で紹介すると次の通りである。

10月5日付けて御書を頂だき、忝く拝見いたしました。折柄冷え冷えしうございしますが、何のご支障もなく、ご機嫌よくお過ごしのことを伺いましておめでとうございします。先月21・28日には能のお稽古を遊ばしましたとのこと、ご番付を頂き拝見いたしました。胤次へも拝見させました。相変わらず切ばかりなさっておられるご様子ですね。ご気丈なことと存じます。用人の(福田)奎平へも拝見させました。ご機嫌よく勇ましくお過ごしのこととはめでたいことと存じますが、宙返りなどはなさいませぬようお願い申し上げます。鷹野にも寒い時分はお願いくださいますように。

熊本の筒口屋敷にお住まいの弟清記様も、先だっては体調が勝られないとのことでありましたが、ご全快なさった由、おめでとうございします。能のお稽古の時は、二の丸の弟興彰様もお出で遊ばされましたとのこと、ご兄弟お揃いになり、皆様お元気で、おめでたいことと存じます。

江戸では、白金下屋敷の静証院様もご機嫌

よく、紀伊家の小石川の皆様もお揃いで、めでたいことと存じます。

殿のご発案で、干れいし(荔枝)をお送り頂き、忝く存じます。好物ですので、早速戴くことにいたします。お世話頂きましたこと大変ありがたく存じます。

1 御妹三千姫様のご主人安藤大和守様のご体調が、まだ、捗々しくないとのこと、お気の毒に存じます。

1 御別紙の様、拝見いたしました。

今度、厳しくご省略(儉約)を仰せ出されましたとのこと、お書付もお送り頂き、堀平太左衛門からも(樋口)元賀の方へ知らせがあり、元賀に読ませて承りました。

そちら様でも、厳しいご省略を仰せ付けられましたとのこと、用人からも委しく申してきました承りました。さてさて、ご尤ものことと存じます。

こちらでも省略するようにと仰せ頂き畏まりました。これまでも、何かと省略もいたしました、行き届かないこともございました。

今度のことは、色々おめでたいこともあって、ご入用もあることとございしますので、どのようにもして暮らす所存でございしますので、またまた、厳しく申しつけます。付きの者についても、調べて、省略をするように申し付けます。奎平へ頼みまして、万事、世話をしてくれる筈でございします。

今度、段々調べましたが、まだ調査がすんでおりません。私も思いつきましたことは老女達にも申しつけます。これ迄、奥向きで行き届かなかったことは、お聞きになっているかと思ひます。

次右衛門も番入いたしましたし、奥付の者も3人になって締まりもよろしゅうございします。(木村)只右衛門も何かと世話してくれますし、高瀬も快く勤めてくれます。高瀬が、皆と話し合って、省略するよういたします。これ迄、末の方で、少々心得違いのこともございましたが、只右衛門と高瀬が申し合わせ、

世話をしてくれ、奥向きもよほど締まってきました。

次右衛門は、なじみの者でございますので、随分、親切に世話をしてくれますので、喜んでおります。(成瀬) 尉内は、ますます年寄り、時々持病で引き込むこともございます。次右衛門がよくしてくれますので、私はじめ、皆大変喜んでおります。

然し、胤次の河岸舎を2人で勤めることは気の毒に思います。河岸舎にもどうぞ良い者をお付けくださいますようお願い申し上げます。

今度の省略のお書付のご様子では、御前様も、さぞ、お心遣い・お世話遊ばしましたことと存じます。お察し申し上げます。及ばずながら、私も世話いたしますが、私の了見では、行き届かないことで、つまらないことばかりでございます。何事も、江戸にお着きになりました上で、何かとお伺いしたいとお待ち申し上げます。

熊本でも、淋しいことで、お月見も年忘れ会もなさいませんとのこと、こちらでも、同様にしたいと存じます。

先だっては、水前寺へお出でなさいましたとのこと、この時も手軽くなさいましたとのこと、ご尤ものことと存じます。

こちらでも、一向、お酒をのむこともございません。仙寿院・栄元なども一度もお呼びしていません。お呼びすれば、あまり粗末にもできませんので。その上、前々と違い、私もお酒を頂きませんので、難しいと思い、お招きもしていません。

胤次は丈夫で、物事についての了簡もよく、大人しく稽古事に励んでおられます。相変わらず、しおらしくいたしておられます。私が少し癪の様子でありますと、河岸舎に来るようにとお世話されます。元氣の様子に大変喜んでいます。

斧・豪次も、随分丈夫でございます。斧は吹き出物も少しも出来ず、食事の食べ方もよ

うございます。昼間は乳を飲むのも忘れ、遊んでおられます。言葉のよく分かり、続き歌などを歌うことができるようになりました。何事が気に入らない時は、私の側に来たいということで、乳母よりも私を慕ってくれます。誠にしおらしいことで、その気持ちを大切にしています。

豪次は大変腕白です。手を添えますと歩くことが出来るようになりました。

私は、外に慰みがありませんので、子供達によってまぎれています。昼寝・うたた寝などは一向致しません。そんなことをしましたならば、斧が大変嫌いますので、斧の遊びに、私も浮かれまして、何よりの楽しみでございます。その様子を御覧に入りたいと申し上げます。その様子を御覧に入れたいと申し上げます。その様子を御覧に入れたいと申し上げます。

熊本は、寒気が強く、薄氷も張りましたとのこと、その後はそうでもないとのことでございますが、今頃は如何でございますでしょうか。

江戸も冷え冷えしいことで、当月5日には初雪も降りました。日増しに冷えが強くなりました。

お風邪でも召しませんように、お願いくださいまして、御機嫌よくお過ごしくくださいますように。

平太左衛門はじめ、此井・嘉門へも、恐れ入りますが、よろしくお伝えくださいますようお願い申し上げます。

(追伸)

こちらでも、変わりなく暮らしております。どうぞ、ご心配なく。

この手紙でわかることは、次の通りである。

- ① 熊本の重賢の動静
- ② 熊本からの贈り物
- ③ 江戸下屋敷の静証院のこと
- ④ 妹三千姫の主人安藤大和守の体調
- ⑤ 熊本からの省略の通知
- ⑥ 江戸上屋敷の奥付の家臣達のこと
- ⑦ 胤次・斧・豪次3人の子供達の様子

なお、子供の生年月日は以下の通りである。

胤次 宝暦9年(1759)4月25日熊本にて誕生

芥 明和2年(1765)9月13日江戸にて誕生

豪次 明和4年(1767)9月8日江戸にて誕生

5. 奥付の家臣達

(1) 福田杢平 先祖は備前国で宇喜田秀家に仕え、秀家没落後、丹後国で細川忠興に召出され、豊前入国後200石拝領。杢平は6代目で、寛延元年御小姓組、宝暦6年用人となった。

(2) 樋口元賀 先祖は筑後の者で、肥後国に来て町医をしていたが、寛文元年新田支藩主利重に医師として召出され、元禄17年具付となった。当元賀は、3代目で、京都で具付医師として召出され、具没後は江戸定詰めとなった。寛延3年重賢

夫人の定付となった。なお、明和5年11月28日病死とあるので、最期までご奉公したことがわかる。

(3) 木村只右衛門 先祖は江州彦根の産で、杉山検校の弟子で、綱利生母清高院付として鍼のご用を勤めた。父は具付であった。当只右衛門は寛延3年から重賢夫人付となった。

(4) 成瀬尉内 先祖は徳川家康に仕え、徳川忠直付、後お暇、池田光政に仕える。初代は、紀州家に仕え、後、久我家に仕え、正徳元年具付。尉内は2代目で、はじめ具付、具没後は熊本・江戸御裏勤めをし、寛延3年から重賢夫人付となった。明和5年は72歳である。

なお、仙寿院は將軍家治付の奥医師河野通頼である。栄元は將軍家治付の奥医師吉田忠祝か兼康弘道のいづれかであろう。

かわぐち やすこ 附属図書館客員教授



紅白梅蒔絵箆笥